

「川崎ジュニア文化大賞」受賞作品

「二十年後の僕へ」

鷺沼小学校 6年 扇山 裕成

こんにちは、二十年後の未来の僕。君の今の仕事は？ 夢は叶えられたかな？ 変わらず川崎市に住んでいる？ リニアモーターカーは川崎を走っている？ 川崎市の三色のシンボルマークは変わっていない？

将来の夢は？と聞かれる度に「誰かの役に立つ仕事に就きたい」とばく然と考え、薬の開発、ロボット開発と、君の姿にたどり着くまでに僕はいろいろ思いをはせている。

川崎市は南武線沿線に国内有数のIT企業がある。将来その辺り一帯が日本のシリコンバレーのような存在になっていて、世界中の若者が夢を抱き集まる場所で、そこで研究者として働いている自分の姿を想像してみる。川崎市は音楽の町だから、もしかしたら趣味のバイオリンが高じて音響効果の研究をしているかもしれない。だとしたら、家からの通勤も楽し川崎市に住み続けているだろう。ただ、将来はサテライトオフィスが増え、通勤はあまり無いのかもしれない。

僕の描く未来はこんな感じだ。サテライトオフィス用のカフェのような快適な場所が近所にたくさんあり、そこは企業の壁が無く、自宅から近い好きな場所を日替わりで選んで働ける。子供が生まれても、カフェに併設された保育所に預けて仕事をする。専門の小児科医も常駐している。受付はロボットで、表情も豊かで会話も人と変わらない受け答えをする。きっとパソコンの形態も変わっていて、パソコン自体を持ち歩かず、バーチャルパソコンになっているかもしれない。オフィスの壁には大画面の5Dモニターがあり、ミュージアム川崎のオーケストラ演奏が流れている。その音は聴きたい人だけに届くシステムだ。バーチャル室では川崎能楽堂の能楽の体験ができたり、気晴らしの散歩に江戸時代の川崎宿を歩ける。ラゾーナ川崎の洋服試着もバーチャル室なら簡単だろう。川崎フロンターレのメンバーとのサッカーの試合もバーチャルならばできそう。

こうしていろいろ未来を考えてみると、この職業に就きたい！という思いよりも、想像する未来を実現する事がぼくの夢に重なってくる。ロボット開発、カフェの設計、5Dモニターの開発、バーチャルシステムの開発、快適な保育所作り、江戸時代を再現する歴史学者など、想像するだけで夢の数は増えていく。とはいえ、今の僕には小さい頃からの「薬の開発」という夢がまだまだ大きな存在だ。

ただ、夢はたくさんある方が幸せだろうし、夢は変わっても良いと思う。夢の大きさも自分が基準だ。人から見てその夢が大きくても小さくても、僕がワクワクする大切な夢たちなのだ。必ずその夢たちは僕の想像する未来につながる何かではあるだろうと思っている。

ある時、自宅に「川崎市こども未来局」というところから手紙が届いていた。僕に関するお知らせの手紙だと知った時、そのネーミングにとっても感動した。と同時に、僕たちこどもは大人たちにとっての「未来」であり、期待されつつ大切にされていることも感じた。

明るい未来を考えられるのは、大人たちが整えてくれた十分な環境があるからだ。充実した今は未来へのジャンプ台になるのだと感じる。

さて、君の過ごしている二十年後の世界は僕の考える未来がどの位再現されているのだろうか？ 川崎市はどう進化しているのだろうか？

二十年後にこの文章を読んで僕はどんな感想を口にするだろう？

君にとっての今は僕にとっての未来だ。そして、僕の今は君の未来にもつながっている。そう考えるだけで、僕の夢はまた一つ実現に向けて歩き始めるのだ。